

「いや、でも」も悪くないかもしれない話 Maybe “Yes, but...” Isn’t So Bad

池原 優斗[†], 竹下 昌志[‡]
Yuto Ikehara, Masashi Takeshita

[†]北海道大学, [‡]名古屋大学
Hokkaido University, Nagoya University
yuto.ikehara.r@gmail.com

概要

理性的言語による対立的な言語実践が、パフォーマンス心理学における「Yes, and...」による発達のコミュニケーションになりうる可能性を持つことを、著者らが行ったヴィーガニズムについての対話や、Podcast 制作の事例を通して提示する。方法的には、本論は、表現活動を通してこそアクセス可能な知をエスノグラフィックに描出することを試みる研究である。さらに、本論の事例を通して日常生活に埋め込まれたパフォーマンスがアートとして立ち現れてくることについて、若干の考察を行う。

キーワード: パフォーマンス心理学, 発達, エスノグラフィ, ポッドキャスト, 理性的言語

1. はじめに

本論では、第一著者の池原と第二著者の竹下によって行われたヴィーガニズムについての対話や、Podcast 「AI かもしれない話」を始めた事例を通して、理性的言語による対立的な言語実践が、パフォーマンス心理学における「Yes, and...」による発達のコミュニケーションになりうる可能性を持つことを提示する。

パフォーマンス心理学の議論をリードする Holzman (2018 岸・石田・茂呂訳 2020) は、人々が一人ではできないことを可能にするための場としての発達の最近接領域 (Zone of Proximal Development: ZPD) を創り出すための方法のひとつとして「Yes, and...」を挙げる。

「Yes, and...」はインプロにおいて場を構成していくための方法で、ホルツマンは「私はあなたの言うことを聞いて、受け入れ、そして、そこへ何かをプラスする」ということであると説明している。例えば、「この電車は、早いなあ」という台詞に対して「そうだね、じゃあ (Yes, and...)、早くボストンに着けるかもしれないね」というようにシーンを創りあげていくのである。「Yes, and...」は、インプロの場面に限られたものではなく、赤ちゃんに対する声かけでは一般的なものである一方で、大人になるにつれて「No」や「Yes, but...」といった否定の語りかけを耳にすることが増えていくとホルツマンは指摘する。否定の語りかけは、二元論、二分法的に何かを評価し、私はあなたより正しいか間違ってい

るか知っているということを示すのに対して、「Yes, and...」はそうした思考を超えて、知ることに頼らないで成長し、新しい会話を生み出すための ZPD を創り出すとホルツマンは述べている。

ホルツマンの議論は、理性的言語を使うことの問題を指摘する人類学の議論と共鳴する。中村 (2024) は、明晰、論証的に事実を記述していく理性的言語だけによらない方法でフィールドの出来事を「別様に聞き、書く」ことを提案している。従来の文化人類学では、フィールドの出来事が「事実」であるかどうか、すなわち「客観的、合理的に導けるもの」かどうかという基準によって正統な研究の対象が規定されてきた (中村, 2024)。しかし、そのような記述の態度では「ややもすれば通り過ぎてしまうような生のリアリティをすくい上げる」(中村, 2024) ことができない。そして、中村はエスノグラフィーについて、「ときに「事実を表す」というより、それを書くことを通して、私たちが他者への親密さと同時に葛藤を感じたり、何かの喪失の経験を文字にして何とか生きていこうとしたりする揺れ動きを可視化する」ものであると論じ、理性的言語によるものとは別のエスノグラフィーを提示している。

否定の語りかけや理性的言語への問題意識は、従来の学術的な研究プロセスとテキストではない形で研究を行おうとするアートベースリサーチ (Leavy, 2020 岸・東村・久保田訳 2025) とも重なっている。これらの議論は、分割された個人による真偽の判断ではなく、他者を含み込んだ全体的な経験と活動の中で新しい文化 (パフォーマンス) の創造を志向するものである。

しかし、理性的言語と別様に語ることは、単純に、二元論、二分法的に対置されるものではない。そもそも、理性的言語とそうではないあり方を分けること自体が二分法的な思考である。そこで、本論では、第 2 章で紹介する事例を通して、発達のなパフォーマンスが、否定の語りかけや理性的言語によって形づくられることがあることを議論する。そして、第 3 章の Podcast 制作プロジェクトの事例を通して、理性的言語によるパフ

パフォーマンスから新しい活動、新しい文化が生まれてくることを論じる。第4章では、本論の議論をまとめると共に、日常におけるパフォーマンスと芸術の関係性について本論で扱った事例を通して示唆されるものを提示する。方法論的には、本論はPodcast制作という表現活動を通じた研究でありアートベースリサーチの側面を持っている。また、事例の記述や分析はエスノグラフィの方法を用いる。本論で取り上げるデータは、池原のフィールドノーツ、Podcast制作時のチャット記録、およびPodcastの内容に基づいている。

2. ヴィーガニズムについての会話

池原と竹下はよく理性的言語による対立的な会話を行っている。その会話は、ホルツマンが提示する「Yes, and...」によるものとは一見異なったものである。しかし、その対立的な会話は、会話を続け、展開させ、新しいパフォーマンスを生み出していく「Yes, and...」の性質を持っている。その例として、ヴィーガニズムについての会話の例を紹介する。

2023年3月1日、池原と竹下は科学史についての読書会を終えた後で、ヴィーガニズムについて会話を始めた。竹下は功利主義倫理学の観点からヴィーガニズムを支持し、実践している。池原はどうかして肉を食べることを正当化できないかと考えており、「ヴィーガンへの反論として、肉を食べることはナイスだからという反論を見つけたが、それについてはどう反論できるのか」ということを竹下に聞いた。それに対して、竹下は「そういう反論はそもそも問題としない」と言った。これは倫理的規範と美的規範は違うということに基づいて、美的規範ではなく倫理的規範の話にとどまった上でヴィーガンを主張しているというスタンスであるため、竹下はこう言った。それに対して、池原は「動物倫理は複数の自然、世界を想定するとどうなるのか」ということを聞いた。これは人類学における多自然主義や多元的な存在論が存在するという議論を念頭に置いたものであった。功利主義的なヴィーガニズムでは、快苦の功利計算に基づいて道徳的配慮を行うため、痛み、苦しみを感じることができるかというセンチエンスが、道徳的配慮の対象になるか否かの基準となる。そして、痛みや苦しみを感じられるかどうかは科学的な検証や推論に基づいている。そのため池原は、この質問に続けて、科学とは異なる存在論（自然）においては、そもそも科学を前提として構築された動物倫理に

についての論は通用しないのではないか、ということを知った。竹下はそれに対して「複数の世界は想定しない」と言った。この議論の過程で、池原は西欧的な存在論と科学的な存在論を混ぜたような言い方で議論を進めていた。そのため、竹下は「西欧なのか科学なのかどっちなのか」と突っ込んだ。池原はそれに対して、「西欧の地域的文脈のなかで作られた文化としての科学ということでそう言っている」と説明した上で「ただ、複数の世界のなかでそれぞれ倫理が存在すると考えたとき、動物を食べることは倫理的ではないということになるのか」と言ったところ、竹下は「それについては、倫理的ではないと言うことは不可能」と言った。続けて、池原は「多数の世界があるなかで、各世界において倫理について実在論を取っていきたい」と発言し、竹下は「まあ理論上は可能ですね」と言った。

この後に、話題は倫理に従うべきか、という議論へと移っていく。そこでは、両者の考えは平行線でありながらも、相互理解が行われることになる。まず、竹下は「結局のところ倫理というものは功利原理で説明できるが、倫理には規範性のような、他人も従うべきだというようなものはない」と話し、池原は「倫理に従うかは好みの問題なのか」と聞いた。竹下は「そう」と言った上で、「多くの人は倫理や自己利益は重要だと思っているので、説得したり、法によるサンクションを設定したりすると、他の人を変えていける」と話した。それに対して池原は「倫理はそれぞれ異なっているので普遍的な倫理は存在せず、最終的な決定は政治闘争によって行われるべきで、それは倫理学が扱うことではないという自分の考えと近いのではないか」と言った。しかし、竹下は「あくまで世界は一つで、倫理は一つであり、それは功利主義なのだ」と主張した。これを受けて池原は「竹下さんの話をよく聞いているとあまり違いがないように感じてきた。結論としては相対主義になるのではないか。池原と構造は結局同じなのではないか」と述べたところ竹下は「相対主義を取るレベルが違うだけという点ではそう思う」と言った。

この会話の特徴的な点は、常に理性的言語によって行われているということである。事例では、哲学的にそれはどう整理できるのか、論理的にお互いが言っていることは誤っていないか、ということが意識されて、コミュニケーションが展開していった。例えば「西欧なのか科学なのかどっちなのか」という竹下の発言は、概念的な整合性を指摘するものである。また、それに対して反省的に考え、意見を訂正することも、理性的言語によ

る会話の特徴と言えるだろう。この事例において、そうした理性的言語による会話の展開は、相互理解のためのパフォーマンスを作り出すことになった。この事例では、お互いが共有している視点がどのようなものか、すなわち「相対主義を取るレベルが違っているが、同じようなことをしている」ということに気がつくのに至るまでの会話は、倫理と規範性を切り分けて整理していく理性的言語による会話から生まれている。

また、この会話ではほとんどが否定によって行われている。しかし、否定しても、会話は終わらず、次々に展開していく。会話では、否定されたものを前提として、さらに別の角度からは相手はどう捉えるのかを聞いていくように会話が進んでいった。そして、こうした会話の展開が、池原による功利主義の理解や、竹下による池原の美的規範や存在論についての考え方の理解に繋がっていった。新しい理解を生み出すためのパフォーマンスが生まれたということであり、この事例において「いや、でも」と自分の論を主張する否定の語りは「Yes, and...」と同じ性質を持っているのである。また、これは「Yes, and...」は暗黙的に行われるものであるということを含意するものでもある。

3. Podcast「AI かもしれない話」の制作

池原と竹下が開始した Podcast の制作プロジェクトの事例について紹介する。この Podcast は前章で紹介した、理性的言語による対立的な議論について、別の流れ、別のテーマ、別の場所で再演するパフォーマンスを試みることである。

池原はアカデミックな方法以外で何か自らの考えを発信するような場を作りたいと思い、竹下と話をしているといつも面白い展開になると思っていたこと、また、以前 Podcast について誘われたこともあったので、竹下に声をかけ、このプロジェクトを始めた。竹下は既に別の Podcast のプロジェクトに参加しており、Podcast についてノウハウがあった。そこで、どのような Podcast にするかを相談するために2026年2月7日にミーティングを行った。池原は事前に、文系の専門的視点から見える AI 時代に必要な価値創造を語りたいが、直接的に語るよりも、日常的な会話の中から AI の話に繋がるようなものが良いのではないか、ということを提案しており、ミーティングもそれをベースに議論が進んだ。そこで、竹下は「自分の身の回りの研究関連で、なんか最近こんなこと考えたり見たりしたんだよねみたいな話

からスタートする」というような形式はどうか、ということ提案し「例えば私は最近ちょっと長期主義を真面目に勉強し始めてるんですけど、なんか思ったより長期主義は理論的に説得的なんじゃないかとだんだん思い始めて」と話し始めた。池原は「あ、そうですか」と相槌をうち、竹下が「そう、前は理論的にも実践的にも、なんか懐疑的、批判的だったけど、最近、実践についてはまだ批判的だけど、理論的には支持すべきじゃないかと思えてくるみたい」と続けた。それに対して池原は「あ、そうなんですか。今の犠牲は許容されるんですか」と聞いた。ここで「今の犠牲」とは、長期主義においては、長期的な幸福の最大化を妨げる場合は、今現在において不利益を被る者がいることを許容する議論であることを念頭に置いている。ここまで話した上で竹下は「そうそう。もう面白いじゃん」と言った。

この時点で、第2章で取り上げたときのように、普段通り話しているような感じで話すと、Podcast として成立するという感覚が共有された。こうした方針によって Podcast を作りあげていくということは、収録において日常におけるパフォーマンスの再演を試みるということである。それは、第2章で述べた、理性的言語を基盤にして、対立的な意見がありながらも、「Yes, and...」的に新しいパフォーマンスを展開していくようなものであると言えるだろう。

実際に、第1回の Podcast においても、池原と竹下の議論は対比的なポジションで会話をしている。その例として、音楽の CD 音源とライブ音源についての議論を取り上げたい。Podcast において池原は「最近思ってるので言うと、下手なんだけど、粗いんだけど、洗練されている表現ってあるじゃないですか。一番わかりやすいのは、CD 音源じゃなくて、ライブ音源にはライブ音源ならではの良さがあるみたい」と話題を提示する。それに対して竹下は「私はライブ音源があんまり好きじゃないんですよ。ちゃんとした録音環境で、もう技巧的に完璧になされてる CD 音源が私は一番好きなんです」と言った。これに対して池原は、「まあでもそこは好き嫌いですよ」と返した。しかし、竹下は「単純な好き嫌いだけには回収されない気がするんですよ。ライブ音源なりの良さがあるっていうのは理解可能なものなんです。でも、それを理解可能にするための解釈がちょっと私は難しいなっています。なんで技巧的に下手になっているのに良いものとして評価されるのかみたいな。そこが私はうまくつかめてないんですよ、自分の中で」と語っ

た。池原は「技巧的に無視していいものと、無視しちゃいけないものがおそらくあって」と言い、「どんなものでも根幹となるものとテクニカルなものがあるわけで、その根幹となるものが、ちゃんとクオリティが上がっているのであれば、テクニカルなものに関しては、全然無視していいっていう感じになるじゃないですか」と語った。そして、「作為なんかずっと作為が嫌いだった話を今日してる気がしますね。でも、自分が人類学してるのも結局作為が嫌いだからかもしれないですね。作為的じゃない、実際の偶然起こった出来事を見たいみたいな」と続けた。それに対して、竹下は「それで言うと、私はなんか作り込まれているものこそ見たいものな気がしますね。ライブ音源と CD 音源もそうだし、論文とかも読んでる時は別にあなたのモチベーションとかどうでもいいから、あのあなたのテクい（筆者注：テクニックのある）アーギュメントを見せてよみたいな気持ちになるときが結構あって」と返した。

この会話では、第 2 章で取り上げたときよりも、対立的なニュアンスは和らいでいる。これは Podcast のコンセプトが、基本的には日常のことを話し、その中で、専門的な話になればそのまま展開していく、というものであったことも影響している。しかし、お互いの立場に着目すれば、池原は作為的なものよりも偶発的なものが好きで、その偶然性が見られるのであれば技巧的な質自体は無視できる点があるとしているのに対して、竹下は作為性が重要であり、技巧的な完成度を最も重視する立場を取っている。この会話では、お互いがすぐに相互の立場を理解し合っている一方で、歩み寄ったり、共有できる考えは何かを探し当ててはいない。この点で直接的に「Yes, and...」による展開を行っているわけではない。また、話題は日常的である一方で、議論については、技巧性、作為性などの概念によって互いの主張や意図を分析していく、理性的言語による会話を行っている。この会話は、対立的な立場を取りながら、理性的言語を用いて会話を展開させていくという点で、第 2 章における会話のスタイルである一方で、話題等が異なっている箇所がある。これは日常のパフォーマンスを再演しようとしながらも、Podcast における表現として新しいパフォーマンスを作り上げていった結果であると言える。

4. おわりに

本論では、まず、ヴィーガニズムについての会話の事

例から、理性的言語に支えられた「いや、でも」と自分の論を主張する否定の語りから、発達的なパフォーマンスが生まれてきたこと、それがメタ的に「Yes, and...」の性質を持っていることを論じた。そして、Podcast 制作の事例を通じて、そうしたパフォーマンスの再演がミーティングにおいて企図され、収録においてもまた別の形で「いや、でも」によるパフォーマンスが生まれたことを示した。

本論は Podcast を通したアートベースリサーチの側面を持つものであるが、よりラディカルに考えるならば、日常生活の中にあるアートとしてのパフォーマンスを、Podcast という形式を持つアートに変換していく活動を通した研究 (cf. Frayling, 1994) と捉えることもできる。しかし、第 2 章で取り上げた会話は生活の中にあるパフォーマンスであると言える。日常の中の芸術については限界芸術 (鶴見, 1999) やトマソン (赤瀬川, 1987) といった議論があるが、それを踏まえれば、第 2 章の会話は日常に埋め込まれた芸術的なパフォーマンスであり、第 3 章のミーティングでの会話は、そのパフォーマンスのアート性の発見であったと言える。日常生活の中で行われるパフォーマンスも創造性を持ったプレイであるのならば、私たちは制作をするときも、またそうでないときでも、常に、新しいパフォーマンスによる発達の探究というアートベースリサーチへと開かれていると言えるかもしれない。

文献

- 赤瀬川源平 (1987). 超芸術トマソン ちくま書房
- Frayling, C. (1994). Research in art and design. *Royal College of Art Research Papers*, 1, 1–5.
- Holzman, L. (2018). *The overweight brain: How our obsession with knowing keeps us from getting smart enough to make a better world*. East Side Institute Press. (ホルツマン, L. 岸磨貴子 石田喜美 茂呂雄二 (編訳) (2020). 「知らない」のパフォーマンスが未来を創る：知識偏重社会への警鐘 ナカニシヤ出版)
- 中村沙絵 (2024). 理性的言語をこえて一別様に聞く、書く 大村敬一・中空萌 (著) フィールドワークと民族誌 放送大学教育振興会
- Leavy, P. (2020). *Method Meets Art, Third Edition: Arts-Based Research Practice*. The Guilford Press. (リーヴィー, P. 岸磨貴子・東村知子・久保田賢一 (訳) (2025). 研究法がアートと出会うとき：アートベース・リサーチへの招待 福村出版)
- 鶴見俊輔 (1999). 限界芸術論 ちくま書房